

【曲目解説】

ルネサンスからバロック時代にかけて、イタリアの器楽音楽は燦然たる光を放っていました。協奏曲集「四季」で有名なヴィヴァルディのみならず、当時はヨーロッパを席卷する作曲家が綺羅星の如く排出しました。しかし、18世紀後半から次の世紀にわたり、イタリアはオペラの国と化しました。それに対して、イタリア古典音楽の精神を再認識し、復興させようとする運動が、19世紀も終わりに近づく頃から起こってきました。レスピーギもまたそういう運動の中心として活躍しました。レスピーギと言えば、あの極彩色な傑作、「ローマの松」「ローマの噴水」「ローマの祭」というローマ三部作が思い浮かびますが、「リュートのための古い舞曲とアリア」の三つの組曲は彼の別の一面を見せてくれます。これは、「オーケストラのための自由な編作」と副題が付くように、16世紀から17世紀のイタリア古典音楽から題材が採られています。三つの組曲の中では、弦楽合奏のために書かれた第3組曲が最も有名ですが、第1、第2組曲も魅力的な作品に仕上がっています。今日演奏する第1組曲の原曲は、いずれも16世紀の作品です。ちなみに2曲目の原曲の作者は、ヴィンツェンツォ・ガリレイといい、あの有名なガリレオ・ガリレイの父で、リュート（ギターに似た古典楽器）奏者、作曲家、音楽理論家でありました。

モーツァルトの天才が、音楽のどの分野において最も発揮されたか、いろいろ議論もなされますが、歌劇が彼の偉大な業績の大きな部分を占めていると言っても、そう批難されることはないでしょう。彼の歌劇では、善人も悪人も、というより、善も悪もなく、それぞれの人物がそれぞれの性格、特徴のままに舞台に活写されていると言えましょう。それは例えば、彼の多くのピアノ協奏曲の、特に緩徐楽章でのピアノと木管楽器の掛け合いが、それぞれの楽器の個性のままに調和した、素晴らしい会話となっていることを想起させます。歌劇「魔笛」の台本の荒唐無稽さ、統一感のなさは、よく言われるところですが、深刻な「タミーノ王子」もふざけちらす「パパゲーノ」も、純な「パミーナ」もその母親にして悪役の「夜の女王」も、それぞれの真実が音楽によってしっかりと描かれ、世俗がそのまま聖なるものと呼べるような世界へと昇華しています。音楽的にも、「夜の女王」のアリアの超高音・超絶技巧、「ザラストロ」の重低音、「パパゲーナ」と「パパゲーノ」のコミックソング等々アイデア、工夫と変化のおもちゃ箱のようです。さて、ここでもちなみに「タミーノ王子」は、どうやら日本人らしいのです、歌劇の冒頭のト書きには、「きらびやかな日本の狩衣をまとった」とあります……。

音楽にほとんど関心を持たない人でも「ジャ・ジャ・ジャ・ジャー」は知っているでしょうし、「運命」という曲名、「ベートーヴェン」という名前も知っているでしょう。この古今東西最も有名な曲と言ってもよい「ベートーフェン作曲、交響曲第5番ハ短調」は、確かにその知名度にふさわしい、大変優れた音楽作品です。どの楽章も極めて考え尽くされ、練られており、正に一音符も動かさない必然性に貫かれています。冒頭の、いわゆる「運命が扉を叩く」主要動機が、形を変えながら、後の楽章に姿を現し、全曲に有機的な統一感とドラマを作り出しています。第1楽章の精密さは比類が無く、楽譜ではまるで寄木細工のような緻密さでありながら、神経質な繊細さとは無縁の、畏るべきエネルギーに満ちています。第2楽章の慰めと孤独と希望、第3楽章の戦いと勝利、第4楽章の賛歌（この楽章は、他の三つの楽章に比べ、ベートーフェンとしては道具立てが多いですが、それまでの緊密さからすれば、全体としてバランスがとれていると言えましょう）まで「傑作」という一言の重みが十分に感じられる交響曲であります。ちなみに「運命」という副題が付くのは、日本だけだとか。